

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

邇波

2022
第 9 号

東之宮古墳・土上げ祭

令和３年度

活動記録



バスツアー「穂国を旅する」

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第９号

niwa 邇波

目次

令和３年度活動記録

青塚古墳史跡公園 ……1
木之下城伝承館・堀部邸 ……2
歴史の里・しだみ古墳群 ……3
その他ニワ里ねっと自主事業 ……4
その他文化遺産関連受託事業 ……5
活動年表 ……6

研究論考
庄内川・矢田川水系と尾張國山田郡草創期
赤塚次郎 …… 8

コラム
体感！しだみ古墳群ミュージアムを触る
－ユニバーサルミュージアムの実践－
服部哲也 ……16

エッセー
平面交差した線路にあった東犬山駅
古川博昭 ……21

活動紹介
学校資料を活用した授業について
望月友恵 ……24

会員募集 ……28

■ 表紙・裏表紙写真　/　中野耕司

青塚古墳史跡公園

活用・管理業務を犬山市より委託を受け実施。春には青塚古墳のつどいを感染症対策のために規模を縮小して開催。草刈りボランティア作業は年３回実施、地元を中心にのべ152名もの方にご参加いただきました。東之宮古墳の史跡整備を記念した写真展や企画展「地域に眠る文化遺産 in 犬山東」など地域の歴史を分かりやすく伝える展示を行いました。

1. 邇波史楽座「古代の風に祈りを込めて」　2. ニワ里カレッジ「尾張西北部における戦国時代の城郭と痕跡」
3. 日常管理　4. 古墳草刈り活動２月　5. 子ども教室「みんなでつくろう！樹木名プレート」　6. 青塚古墳のつどい











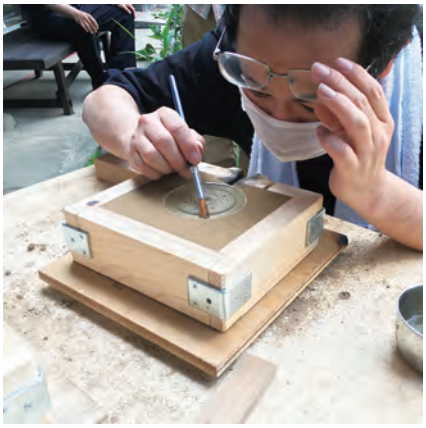


木之下城伝承館・堀部邸

春には「邇波の狛犬」、秋には「常滑船徳利と肥前笹徳利」をテーマにした企画展を開催、それに合わせて月津塾を開講し展示とともにお話しをしていただきました。また、「猪之子座」では落語会や講談会をはじめインド舞踏や歌曲コンサートなど、多様なジャンルの作品を堀部邸の明治薫る雰囲気の中で楽しみました。

1.「鏡チョコレート」を作ろう　2.月津塾「だ龍鏡を鋳込む」　3.猪之子座「上方落語 九雀亭 6」
4.猪之子座「祈りマサラエキシビジョン～」　5.月津塾「酒器物語」　6.企画展「犬山の狛犬群像」













歴史の里・しだみ古墳群

「しだみゅー歴史講演会」には、各地でご活躍の専門家をお招きして講座を開催し、多くの方にお越しいただきました。８月には「夜の音楽会」を開催、包金鐘さんの美声を楽しみました。しだみゅー古墳散策では、春日井市周辺の古墳を見学。また、「お庭に埴輪プロジェクト」では県陶磁美術館とコラボで土作りから行う埴輪制作ワークショップを実施。

1. 夜の音楽会 in しだみ古墳群３　2. しだみゅー meeting「ヤマトタケル内津を行く」　3. ボランティアガイド研修　4. 歴里講座「お庭に埴輪プロジェクト」　5. しだみゅー寄席「古墳 de 上方落語 九雀亭 3」　6. しだみゅー古墳散策「高蔵寺地区」









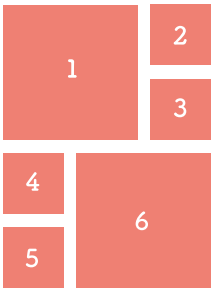




その他 ニワ里ねっと自主事業

春と秋のニワ里バスツアーでは、岐阜県池田町と愛知県豊橋市へ伺いました。現地では市担当学芸員の方にご案内をいただきました。ニワ里ウォーキングは、地元の方のご案内で新緑薫る犬山市城東地区へ。ニワ里サイクリングでは会員さんのご案内の下、岐阜県羽島市を巡りました。学校や地域団体との協働した事業も複数実施しました。

1. バスツアー「穂国を旅する」　2. こどもカルチャー講座（子どもサポートクラブ東海）　3. バスツアー「安八磨郡を旅する」
4. サイクリング「岐南・羽島エリア」　5. 栗栖地区瀬ノ上遺跡調査　6. ウォーキング「城東の文化財を歩く」















その他 文化遺産関連受託事業

犬山市をはじめ複数の自治体から委託を受け文化遺産関連事業を実施しました。犬山市では東之宮古墳の普及事業として「冬至の日の出ツアー」や「土上げ祭」など独自の事業を行いました。尾張旭市では考古企画展・民具企画展の企画制作を担当しました。養老町・関ヶ原町の「西美濃古代皇族の歩み探訪事業」は、これまでの調査成果のまとめとなるシンポジウムや、その関連地をめぐるウォーキングを開催しました。

1.【養老町・関ヶ原町】「ヤマトタケルと伊吹の荒ぶる神」 2.【犬山市】東之宮古墳冬至日の出ツアー　3.【犬山市】東之宮古墳土上げ祭
4.【養老町・関ヶ原町】「広域ウォーキング in 関ヶ原」　5.【尾張旭市】民具企画展　6.【富加・坂祝・美濃加茂市町】学校歴史講談













13 日：美濃国分寺跡史跡指定 100 周年記念シンポジウム・記念冊子作成事業
①梶原義実（名古屋大学）ほか②スイトピアセンター③ 63 名

■ 14 日：【養老町・関ヶ原町】「広域ウォーキング in 関ヶ原」
②関ヶ原町　③ 18 名

17 日：丹羽の里 座学会「ニワの里塔野地村にあった２つの幻の寺」
①高橋幸子　②堀部邸

18 日：ニワ里バスツアー「安八磨郡を旅する」
①横幕大祐（池田町教委）　②池田町周辺　③ 17 名

20 日:猪之子座「日本の芸術歌曲コンサート～明治、大正、昭和の日本音楽～」
①長江希代子・内匠慧ほか　②堀部邸　③ 45 名

21 日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「断夫山古墳と埴輪研究最前線」
①東海古墳時代研究会　②しだみゅー　③ 96 名

23 日：【養老町・関ヶ原町】「広域ウォーキング in 養老」
②養老町③ 14 名

27 日：【大垣市】東町田墳墓群・落語会
②大垣市　③ 70 名

■ 28 日：【大垣市】東町田墳墓群ウオーキングと展示
②大垣市　③ 35 名

12 月

1 日～令和 4 年 3 月 27 日：企画展「地域に眠る文化遺産 in 犬山東」
②青塚古墳

4 日：猪之子座「冬夜会」
②堀部邸　③ 17 名

4 日：しだみゅー寄席「古墳でりんりん２」
①旭堂鱗林（講談）・立川かしめ（落語）②しだみゅー③ 49 名

5 日：あおつか歴史講座「消えた甲塚古墳と東之宮古墳」
①赤塚次郎（ニワ里）　②青塚古墳　③ 36 名

9・１０日：【坂祝町・富加町・美濃加茂市】学校での講談授業
①旭堂南海（講談）

11 日:ニワ里カレッジ「中世城館跡　犬山城大手門枡形発掘調査報告」
①中野拳弥（犬山市歴まち課）②青塚古墳　③ 29 名

12 日:こどもカルチャー講座（子どもサポートクラブ東海）「栗栖の遺跡と土器づくり」
①纐纈茂（名古屋市教委）　②古民家あかり屋　③ 8 名

17 日：東之宮古墳出土鏡チョコレートワークショップ
①浅見貴子　②堀部邸　③ 4 名

19 日：しだみゅー歴史講演会「東三河の積石塚古墳群」
①岩原剛（豊橋市文化財センター）　②しだみゅー　③ 66 名

25 日：【犬山市】「東之宮古墳冬至の日の出見学会」
①赤塚次郎（ニワ里）　②東之宮古墳　③ 13 名

1 月

14 日・15 日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳

16 日：しだみゅー歴史講演会「願成寺西墳之越古墳群」
①横幕大祐（池田町教委）　②しだみゅー　③ 65 名

19 日:丹羽の里座学会「古神社分布から推理する坊の塚古墳の被葬者」
①在野一生　②堀部邸　③ 15 名

22 日：青塚みやげ話の会
①岡本利雄・川村和恵　②青塚古墳　③ 18 名

23 日：しだみゅー「お庭に埴輪プロジェクト」
②愛知県陶磁美術館　③６組 11 名

29 日：あおつか歴史講座「尾北の瓦生産と古代寺院」
①梶原義実（名古屋大学）　②青塚古墳　③ 31 名

2 月

4 日：東之宮古墳出土鏡チョコレートワークショップ
①浅見貴子　②堀部邸　③ 3 名

6 日：しだみゅーお庭に埴輪プロジェクト・ハニワ制作
②しだみゅー　③ 18 名

9 日：青塚古墳消防訓練

12 日：しだみゅー meeting 文化遺産ストーリー「ヤマトタケル内津を行く」
①中野包裕（夢舞台）・大脇由紀子（愛知県立大学）・赤塚次郎（名古屋経済大学）　②しだみゅー　③ 89 名

12 日・16 日・19 日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳　③ 73 名

15 日:しだみゅー講座・発掘調査って何？「愛知県埋蔵文化センターの見学」
②愛知県埋蔵文化財センター　③ 14 名

16 日：丹羽の里座学会
①宮崎賢二　②堀部邸　③ 10 名

20 日：しだみゅー歴史講演会「群集墳を識る高蔵古墳群」
①眞鍋直子（名古屋市教委）　②しだみゅー　③ 66 名

25 日～令和 5 年 1 月 31 日:【尾張旭市】企画展示「陶芸家星合信令と交通観音」
②スカイワードあさひ

26 日：あおつか歴史講座「尾関家・瓦師から犬山焼窯元へ」
①井上あゆ子②青塚古墳③ 20 名

27 日：あおつか子ども教室「古墳の笹でハガキづくり」
②青塚古墳③ 1 組 5 名

3 月

2 日～ 5 日：栗栖プロジェクト「瀬の上遺跡の確認調査」
②栗栖

6 日：しだみゅー「お庭に埴輪プロジェクト」
②しだみゅー　③ 21 名

10 日：【養老町・関ヶ原町】広域ウォーキング「古代養老を歩く」
①廣瀬正嗣（養老町教委）・赤塚次郎（ニワ里）②養老町　③ 14 名

12 日：ニワ里カレッジ「文化遺産と防災」
①今尾享史（犬山市防災交通）・望月友恵（ニワ里）②青塚古墳③ 10 名

13 日：あおつか歴史講座「犬山東エリアの散策」
①尾関立志（尾関作十郎陶房）ほか　②犬山東エリア　③ 19 名

14 日：【養老町・関ヶ原町】広域ウォーキング「古代関ヶ原を歩く」
①富田真一郎（関ヶ原町教委）・赤塚次郎（ニワ里）②関ヶ原町　③ 10 名

16 日：ニワ里バスツアー「穂国を旅する」
①岩原 剛（豊橋市文化財センター）　②豊橋市周辺　③ 13 名

19 日：【養老町・関ヶ原町】「壬申の乱と東国行幸 古代天皇の行路」
①早川万年（元岐阜大）ほか　②上多度プラザ　③ 60 名

20 日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「「昆虫考古学とジオサイト東谷山」
①森勇一（東海シニア自然大学）　②しだみゅー　③ 67 名

21 日：【犬山市】東之宮古墳土あげ祭プロジェクト
①赤塚次郎（ニワ里）　②東之宮古墳　③ 23 名

【養老町・関ヶ原町】西美濃古代皇族の歩み探訪事業調査事業
【美濃加茂市】資料整理補助事業　など


【養老町・関ヶ原町】広域ウォーキング「古代関ヶ原を歩く」


青塚古墳を見守る会・草刈り活動

2021.4 ▶ 2022.3

令和３年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」
①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

緑色：ニワ里ねっと自主事業・協働事業
赤色：文化遺産関連受託事業

4月

20 日～７月 18 日：【犬山市】史跡東之宮古墳パネル展
②青塚古墳

17 日～５月 16 日：堀部邸春の企画展狛犬Ⅱ「邇波の狛犬群像」
②堀部邸

10 日：史跡散策「城東の文化材を歩く」
①高橋幸子（郷土・城東の歴史を知る会） ③ 16 名

17 日：月津塾「邇波の狛犬群像」
①麻野純子・中野耕司（ニワ里） ②堀部邸 ③ 12 名

18 日：歴史講演会「東海六部族の行方」
①赤塚次郎（ニワ里） ②しだみゅー ③ 49 名

21 日：丹羽の里座学会「洪水神話・大毛池田層と５世紀初頭」
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③ 18 名

5月

8 日：青塚古墳のつどい
②青塚古墳③ 402 名

13 日：楽田小学校にて出前授業

15 日：ニワ里ねっと総会
②堀部邸

16 日：しだみゅー歴史講演会「可児川をのぞむ前波古墳群」
①長江真和（可児市）②しだみゅー ③ 46 名

23 日・６月 12 日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳 ③のべ 42 名

30 日：しだみゅー古墳散策「高蔵寺地域」
②高蔵寺周辺 ③ 30 名

6月

7 日：月津塾「だ龍鏡を鋳込む」
①赤塚次郎（ニワ里） ②堀部邸 ③ 21 名

19 日：ニワ里カレッジ「美濃金山城と近辺の中世城館」
①長江真和（可児市） ②青塚古墳 ③ 21 名

20 日：歴史講演会「矢作川をのぞむ御河国の前期古墳」
①西島庸介（西尾市教委） ②しだみゅー ③ 47 名

22 日：入鹿切れ慰霊祭

24 日：池野小学校にて出前授業

26 日：しだみゅー寄席「上方落語 九雀亭」
①桂九雀・林家染左 ②しだみゅー ③ 35 名

27 日：猪之子座「上方落語 九雀亭」
①桂九雀・林家染左 ②堀部邸 ③ 24 名

7月

9 日：【養老町】キノコワークショップ「マイタケの伏せ込み」
②日吉小学校

11 日：【養老町・関ヶ原町】「ヤマトタケルと伊吹の荒ぶる神」
①川島行彦（関ヶ原町地域振興課）・早野浩二（愛知埋文）・大脇由紀子（愛知県立大学）・赤塚次郎（ニワ里ねっと）②関ヶ原町歴史民俗学習館 ③ 95 名

17 日：猪之子座「INORI 祈り～マサラ混ざる エキシビジョン～」
②堀部邸 ③ 36 名

17 日：「犬てつ子ども風土記プロジェクト」協力
②青塚古墳

18 日：しだみゅー寺子屋鈴鏡「山辺・磯城の大古墳群」
①今尾文昭（NPO 東海学センター） ②しだみゅー ③ 69 名

22 日～８月 29 日：企画展「行ってみよう！学校のそばにある遺跡」
②青塚古墳

8月

3 日・10 日：こども研究員養成講座
②しだみゅー ③ 15 名

7 日：あおつか子ども教室「みんなでつくろう！樹木名プレート」
②青塚古墳 ③ 2 組 16 名

13 日：【養老町】パラリンピック採火式火打ち石ワークショップ
②養老町

15 日：おうちで博物館ツアー・しおんじやま古墳学習館オンライン企画
②青塚古墳

18 日・21 日：あおつか子ども教室「青塚古墳を見学しよう」
②青塚古墳 ③のべ７組１６名

21 日：ニワ里カレッジ「尾張西北部における戦国時代の城郭と痕跡」
①宮川充史（尾西歴民） ②青塚古墳 ③ 24 名

22 日：しだみゅー歴史講演会「飯田古墳群」
①小林正春（長野県考古学会）②しだみゅー③ 63 名

25 日：あおつか子ども教室「古代の植物繊維を取り出そう」
②青塚古墳 ③５組 14 名

27 日：あおつか子ども教室「オリジナル段ボール椅子を作ろう」
②青塚古墳 ③８組

28 日：しだみゅー夜の音楽会
①ボウジンゾン・安井正規ほか②しだみゅー ③ 300 名

9月

19 日：しだみゅー歴史講演会「三旗古墳群と女良塚古墳」
①穂積裕昌（三重県埋文） ②しだみゅー ③ 47 名

25 日：青塚古墳を見守る会・草刈りボランティア
②青塚古墳 ③ 37 名

25 日：「犬てつ子ども風土記プロジェクト」協力
②栗栖

28 日・29 日：楽田小学校にて出前授業

10月

2 日～ 11 月７日：秋の企画展「船徳利と笹徳利」常滑船徳利と肥前笹徳利
②堀部邸

3 日：ニワ里カレッジ「海部郡一色城」
①永井邦仁（愛知埋文） ②青塚古墳 ③ 26 名

9 日～令和４年９月 30 日：【尾張旭市】民具展「尾張旭の夏の祈り」
②スカイワードあさひ

10 日：邇波史楽座「古代の風に祈りをこめて」
①長江希代子（ソプラノ）、安井正規（電子オルガン）、岩本有里子（舞踊）、中野包裕（語り）②青塚古墳③ 180 名

16 日：しだみゅー古墳散策「下原古窯と下街道沿いの古墳」
①浅田博造（春日井市教委） ②しだみゅー ③ 22 名

17 日：しだみゅー歴史講演会「世界遺産の中の帆立貝式古墳」
①河内一浩（羽曳野市） ②しだみゅー ③ 71 名

23 日～令和４年１月 30 日：【大垣市】墨俣一夜城開館 30 周年事業「パネル展」
②墨俣一夜城

30 日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり７」
①旭堂南海（講談師） ②堀部邸 ③ 16 名

31 日：【大垣市】墨俣一夜城歴史講談会
①旭堂南海（講談師） ②墨俣さくら会館文化ホール ③ 95 名

11月

1 日～ 12 月 10 日：美濃国分寺跡史跡指定 100 周年事業パネル展
②大垣市歴史民俗資料館

3 日：ニワ里ねっとサイクリング「岐南・羽島エリア」
①古川博昭（ニワ里） ②岐南・羽島エリア ③５名

6 日：【春日井市】消しゴムワークショップ
②春日井市中央公民館 ③７組

7 日：月津塾「酒器物語」
①坂野俊哉 ②堀部邸 ③７名

庄内川・矢田川水系と尾張國山田郡草創期

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
赤塚　次郎

1. 山田郡

尾張國「山田郡」には船木・主恵・石作・志談・山口・加世・両村・餘戸・駅家・神戸・（山田）の郷が存在したことが推測されている。各地域名称の所在地については諸説あり、そのうちで概ね衆目の一致を見ているものは、長久手市の岩作（やざこ）を起点とする香流川水系「石作郷」、名古屋市守山区志段味地域を中心とする「志談郷」、矢作川上流域の瀬戸市山口「山口郷」などが考えられている。他に豊明市の「両村郷」の可能性が指摘されてきた。またお隣の「愛智郡」は中村・千竈・熱田・作良・成海などいわゆる名古屋台地を中心としその西・南に広がる潟状地形を含めた領域を主体とする。これを前提にすると、山田郡とは名古屋市域とその周辺地域の「愛智郡」を除く丘陵部をほぼ全て含むような広大な領域にも見えてくる。庄内川水系に加え猿投山西南麓から流れ落ちる矢田川や天白川、さらには境川までの河川流域が含まれる事になるが、はたしてどうであろうか。

まず問題にしたいのが式内社の分布であり、明らかにその分布は庄内川・矢田川水系を基本にまとまる傾向が見られる。天白川は愛智郡針名神社が鎮座する領域となる。両村郷（境川水系）をどこに比定するかはさらに再検討の余地があるが、いずれにしろ山田郡の中心的かつ主体的な領域は、やはり庄内川・矢田川水系と位置づけることには異論はなかろう。そしてその風景は、猿投山を仰ぎみつつ瀬戸山口を起点に矢田川・香流川水系を降り名古屋台地北端からその北側に広がる湿地帯に至る流域と考えて良かろう。

2. 縄文・弥生時代

さてまずは縄文・弥生時代の風景を考えてみたい。縄文時代遺跡の分布は瀬戸市品野・山口に分布が見られ、草創期の品野西遺跡から後・晩期の大六遺跡や大坪遺跡などが点在する。また小幡台地や名古屋台地北端には後期末から晩期にかけての集落遺跡である守山区牛牧遺跡を代表として、中期の片山神社遺跡・長久寺貝塚などが存在する。矢田川水系には分布がほとんど認められないが、後・晩期になり各水系に小集落を営む傾向は読み取れる。

一方で弥生時代になると、中期から後期にかけて矢田川水系には長坂遺跡をはじめ瀬戸地域にも小規模な集落遺跡が分布するのであるが、やはり最も注目されるのが名古屋市西区の西志賀遺跡であろう。拠点的な環濠集落の出現はこの地域において画期的な出来事性をもたらしたものと思われる。また庄内川水系では前期に春日井市松河戸遺跡、さらに勝川地区周辺にも中期以後集落遺跡が出現し、後期になるとむしろ上流域である春日井市神領・気噴地区に集落遺跡が集中する傾向が見られるようになる。

このように縄文から弥生時代にかけては、各水系・盆地などで散在的に人々が営みを繰り返し、なかば断続的に集落遺跡が形成されていったと考えられる。したがって各地の文物や人々が集まってくる、あるいは集合するような大規模な遺跡や集住する拠点的な地域は認められない。そして弥生時代になり「西志賀遺跡」が登場する。西志賀遺跡の所在する位置は、東に「猿投山」を仰ぎ、流れ落ちる矢田川水系が伊勢湾の海と出会う「潟」状の場面と想定でき、この自然観はまさに朝日遺跡と極めて近似し、「猿投山」を太陽が昇る聖山として仰ぎ見る部族社会の枠内に位置付けられる。

3. 古墳時代早期

この空域において一つ目の画期を見出すのは、やはり弥生前期「西志賀遺跡」の登場である。そして二つ目の画期として2世紀「廻間Ⅰ式期」に注目したい。この時期になると集落遺跡の爆発的な増加が濃尾平野全体の傾向として認められるのであるが、山田郡域においては少し異なる動きが認められた。

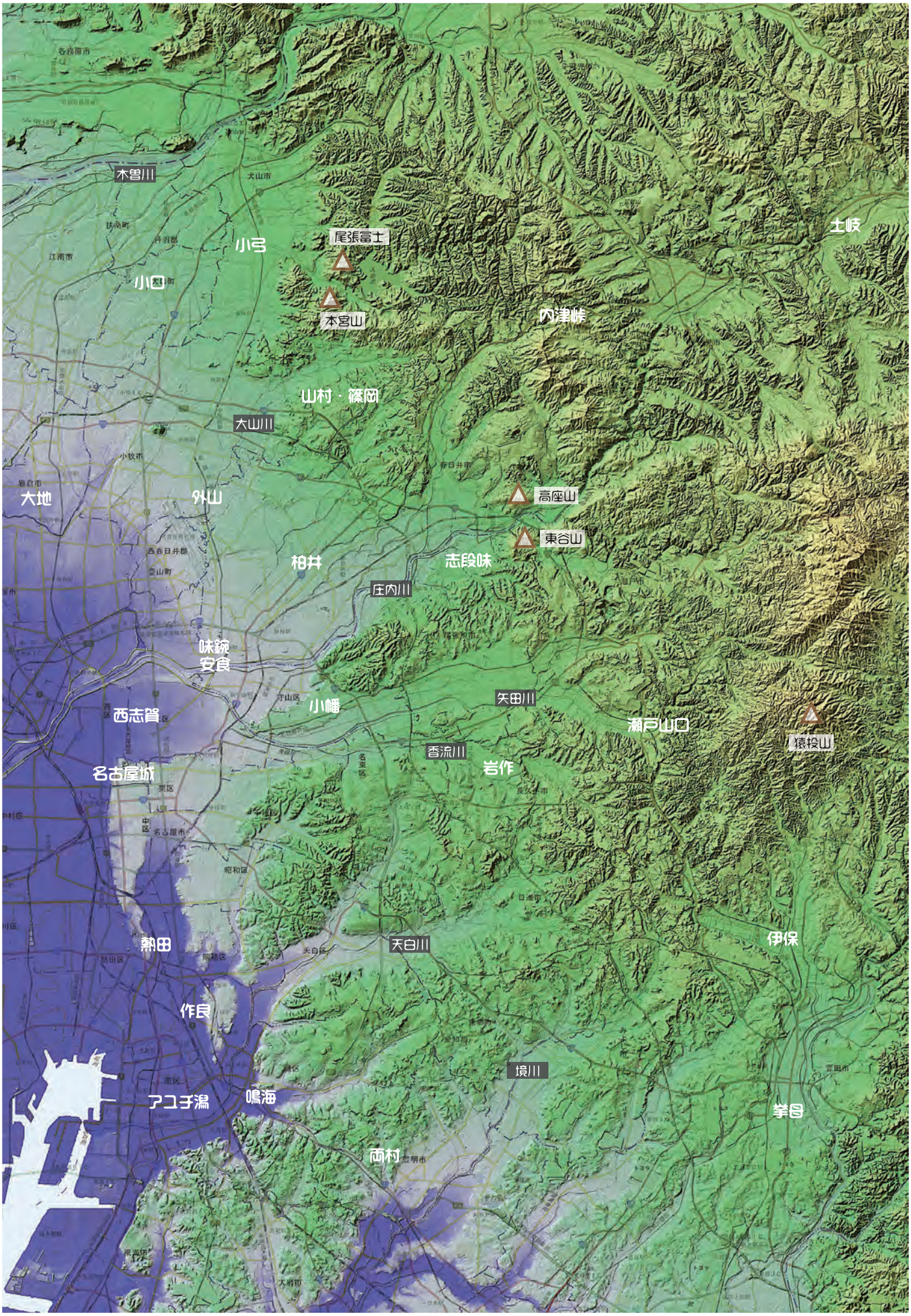


図１　尾張国山田郡（国土地理院webサイト利用・加工）

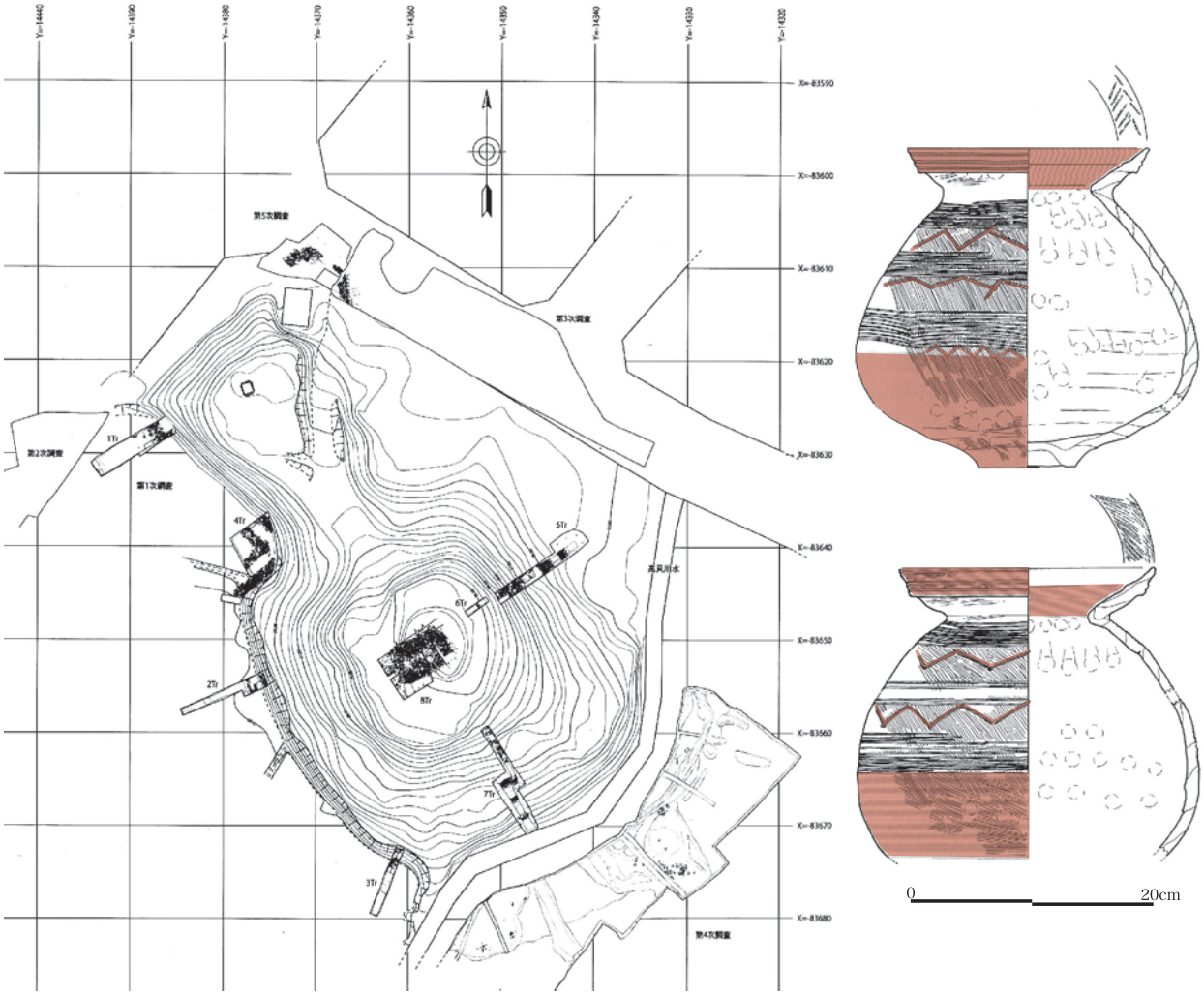


図２　高御堂古墳（1/1000）とパレススタイル壺（1/6 報告書より加筆）

まずは西志賀遺跡の動向に着目してみよう。これまで西志賀遺跡は、弥生前期から後期にかけて大規模な環濠集落が形成されたと評価されてきた（宮腰２００３）。また近接する志賀公園遺跡では集落や墳丘墓（方形周溝型）などが見つかっており（永井２０００）、さらに平手町遺跡でも墳丘墓を中心とした報告がある。これら近接する遺跡群が一つの「西志賀遺跡群」として再評価され、遺跡の動向を総合的に把握する事が最も重要であり期待したい。報告されている概要をみていくと、志賀公園遺跡の動向は弥生時代というまとまりと、古墳時代後期の断続的な水田及び古墳・祭祀遺構などの不安定な遺構群を挟んで、７世紀から再開される集落景観とに大きく大別でき、その間に大規模な河川氾濫が存在した事もわかっている。環境変動期の廻間Ⅰ式期における集落の解体、その後の松河戸Ⅱ式期の洪水層（大毛池田層）との関連を想定して、この地に再び人々が定着し始めるのは、大きく遅れ７世紀をまたねばならない。

どうやら山田郡域の中核とされる志賀公園地域の様相を踏まえて総合しても、律令期に至るまで一つのまとまりある、ほぼほぼ固定された郡的規模を形成するような地域社会には至らない状況であったと推測できる。これが山田郡草創期の基本的推移であったと位置づけたい。古代から一つの領域を作り上げてきた犬山扇状地の「邇波」でもなく、アユチ潟を望む「愛智」でもない、その間の漠然とした空域としての「山田」なる餘部空間が見えてきそうである。

4．前期古墳時代への道のり

弥生時代後期後半から古墳早期、土器様式で言えば山中式後半から廻間Ⅰ式期において注目したいのが西志賀遺跡群の解体である。濃尾平野では拠点的集落の解体に伴いその周辺に小規模な集落景観が増加するような分布が認められるのであるが、現状ではこの空域にはむしろ空白化する傾向が読み取れる。その中で特に注目したのが、庄内川水系上流域での集落の出現である。具体的には春日井市神領地区と大留・気噴地区の遺跡群の存在である。春日井市教育委員会による調査成果を踏まえれば、山中式から集落が登場し、廻間Ⅰ式からⅢ式に至る間、段丘上・

自然堤防上に集落の営みが増加する傾向が読み取れる。一方でこの間、名古屋市西区から矢田川水系では、継続して環境を整え集落遺跡を形成する傾向は認められない。どうやら矢田川・庄内川流域に自然災害的な洪水多発化の環境が長く続き、環境への挑戦が単発的で困難な状況が継続していた可能性が高い。名古屋台地の北端部では集落の存在が確認されている。では、このような状況下で、後の山田郡域における最初の本格的な古墳造営はいつどこで始まったのであろうか。その事を考える上で興味深い存在が、春日井市神領の前方後方墳「高御堂古墳」である。

5．高御堂古墳の登場

春日井市教育委員会による調査成果に基づけば、以下のようにまとめられる。

1．庄内川右岸自然堤防上（標高25m）に立地する前方後方墳。

2．墳長約63m、後方部38m高さ6.9m、前方部幅38m高さ5.1m。

3．東之宮古墳・宇都宮神社古墳と同じく前方部端隅切り規格を持つ。

4．主軸に直交する竪穴式石槨（4.08m×0.92m）角礫＋河原石積（控積みは100％河原石）

5．前方部2段・後方部3段でそれぞれに壺形埴輪を囲繞。

6．葺石は河原石を使用する。出土遺物等伝承も含め皆無。

壺形埴輪の型式的評価から廻間Ⅲ式後半から松河戸Ⅰ式1段階の中で築造時期を評価する内容が報告されている（浅田２０１４）。出土土器を概観する限り、大きく見れば廻間Ⅲ式期後半期を中心として評価しておく事が必要であろう。そしてさらに注目したいのが堀ノ内遺跡ＳＤ05出土遺物である（浅田２０００）。これを高御堂古墳に伴う前方部端の周濠あるいは何らかの関連施設部と想定できる可能性が指摘されている。出土したパレススタイル壺の型式的特徴は、口頸部が外傾し図2右下の内面刺突文は柳ケ坪型壺の影響を受けている。体部は大きく下膨れし、外面はハケメ調整がそのまま残る。赤色波線文は大きく線描表現になる。列点文は施さない。これらの特徴はパレススタイル壺の最終段階のもので廻間Ⅱ式末から廻間Ⅲ式初めの特徴と評価して良い。したがって高御堂古墳の造営開始を廻間Ⅲ式前半期に遡らせる可能性が高く、壺形埴輪の型式的特徴からも大きな矛盾は認められないと思われる。

また高御堂古墳の竪穴式石槨は主軸線に直交する。弘法山古墳（松本市）・高尾山古墳（沼津市）における直交する主体部や、斜交する夕田茶臼山古墳を考慮すると、廻間Ⅱ式期の前方後方墳は主軸直交を志向する傾向がある。Ⅲ式前半の東之宮古墳（犬山市）・象鼻山1号墳（養老町）が主軸並行である点を踏まえると、古い要素とも評価できる。主体部の直交から並行への変化は早くから指摘されていた（小林・近藤1959）が、その後は主体部の絶対方位に意味があるとする頭位論に変化していった経緯がある（都出1986）。本来はやはり主軸を交えた「方位」が問題であると考えるべきであるが、いずれにせよここでは高御堂古墳の造営を廻間Ⅲ式前半期とし、中頃には造営は終了していた可能性が高いと考えておきたい。

6．大留・気噴遺跡群

高御堂古墳の基盤集落は、指摘されているように堀ノ内遺跡群である。ここからは神領銅鐸2口が伝えられており、三遠式銅鐸・突線鈕3式に所属し山中式後半期における製作・使用を想定できる。彼らは山中式期において集落基盤を整備し、銅鐸祭祀を含め地域社会を作り上げていた。その延長上に高御堂古墳が造営されたことは明らかであり、堀ノ内表遺跡の前方後方型墳丘墓の存在も含め、濃尾平野低地部での地域社会の様相と類似する点は注目したい。そしてもう一つ同じ頃に集落基盤を整えはじめたのがやや上流の大留・気噴遺跡群である。調査成果によれば山中式から廻間Ⅰ式、さらにⅢ式期の竪穴建物が存在していることが報告されている。加えて注目したいのが、庄内川を挟んだ左岸より「上志段味出土銅剣」が発見されている点である。中細銅剣を再加工したもので（梶山１９８６）関部双孔などの特徴より廻間Ⅰ式期に何らかの理由から武器形祭祀が行われた可能性が考えられよう。この祭祀行為を行った主体は、対岸の気噴遺跡群であると考えるのが妥当と思われる。墳丘墓や祭祀形態に神領遺跡群との微妙な温度差が存在している可能性があり、出自・影響を受けた地域などの差がこれらに反映されていた可能性が考えられよう。

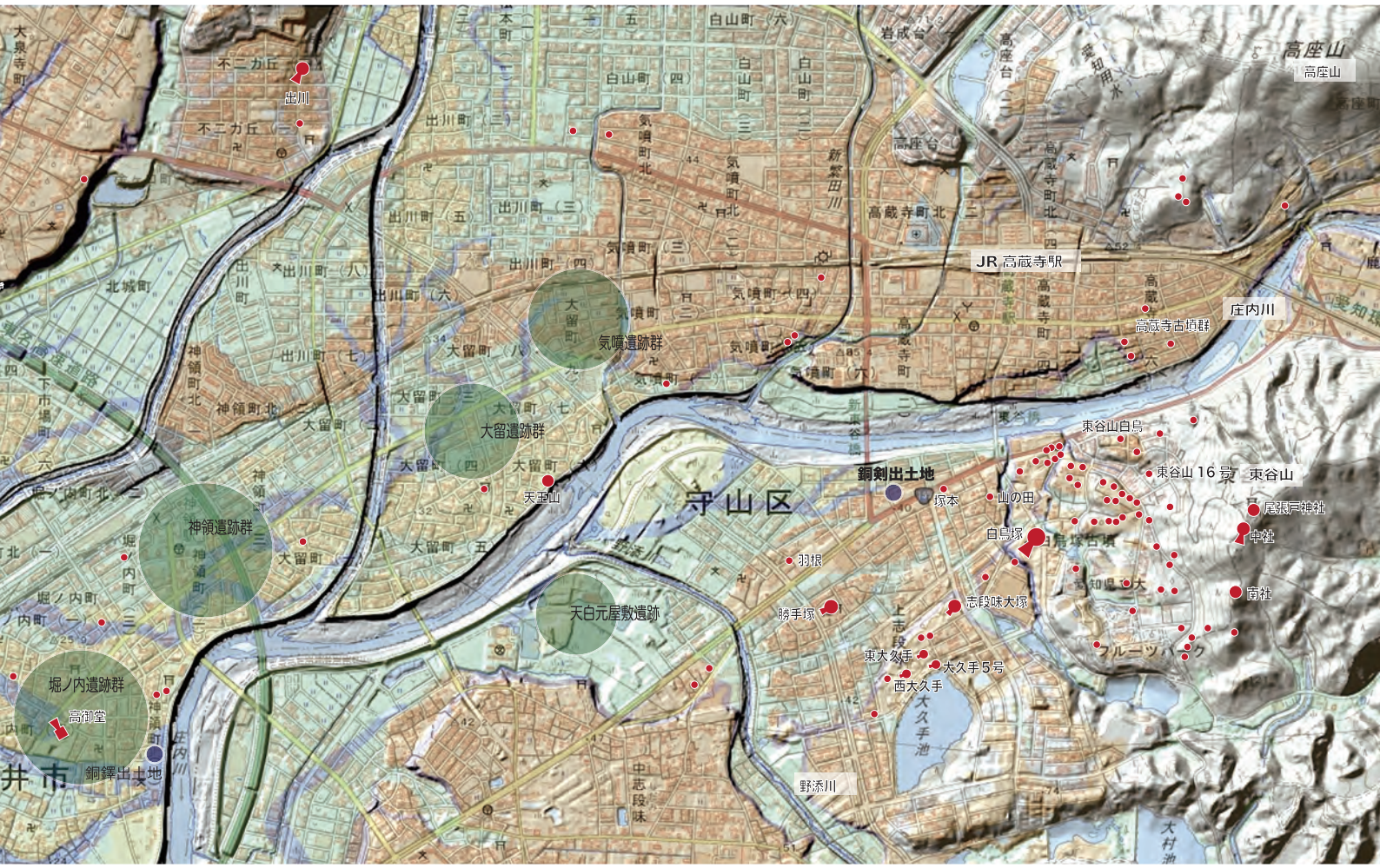


図３　玉野川の遺跡・古墳分布（国土地理院webサイト利用・加工）

さて神領地区では前方後方墳及び前方後方型墳丘墓を立ち上げていったのであるが、大留・気噴遺跡群ではどうだろうか。ここでは最初に立ち上げた古墳造営地を出川大塚古墳と考えておきたい。出川大塚古墳は45ｍの円墳あるいは前方後円墳と推定されており、三角縁神獣鏡２面ほか鼉龍鏡・捩文鏡が出土している。地籍図からは幅の狭いかつやや短い前方部・帆立貝式が推定されている（大下２００１）。古墳規格としては帆立貝式というより、比率的には纏向型前方後円墳に近くその可能性も視野に入れておく必要がある。主体部は粘土槨と推定されている。ところで四面の鏡と石釧の特徴からは、東之宮古墳より新しく兜山古墳（東海市）とほぼ同じころの造営と考えて良い。ただ三角縁神獣鏡の型式変化（福永１９９４）、例えば松かさ形表現の欠損、文様帯獣文配置の省略・簡素化等からは出川大塚鏡が製作変化として先行する。したがって兜山古墳出土遺物の石製小型壺・鼓形器台、合子形石製品の特徴から松河戸Ⅰ式1段階が下限と考えて間違いなかろう。ただ共伴したとされる勾玉類はやや違和感を感じるものであり、複数次にわたる遺物採集が記録されており（久永１９７９）、一括資料と即断するには注意が必要だ。ここでは出川大塚古墳の造営時期を、ひとまず廻間Ⅲ式後半段階を中心とし、松河戸Ⅰ式1段階を大きく下る可能性はない（勾玉類を除く）と捉え直しておきたい。

7．志談郷の領域

以上を踏まえ次に玉野川（庄内川）右岸の集落遺跡群とその指導者たちの古墳造営を整理しておこう。基盤集落は現状での考古学的評価に基づけば山中式から始まる「神領遺跡群」と「大留・気噴遺跡群」と考えることができ、大留六反田地区の調査からも廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式期にかけての竪穴建物などが見つかっている。集落の動向は間違いなく玉野川水系における古墳造営期と重複する。

そして問題はやはり左岸に突如出現した白鳥塚古墳の位置付けである。東谷山山頂には尾張戸神社・中社・南社古墳と連続する古墳が造営される。中社古墳の埴輪から松河戸Ⅰ式後半期と考えれるが、尾張戸神社と白鳥塚古墳の造営時期を示す



図４　三角縁神獣鏡（左：出川大塚古墳　右：兜山古墳1/3）

明確な情報はほとんどない。そもそも同時代に山頂部の古墳群と山麓での単独墳という差異も大変気になるところである。深谷淳によれば白鳥塚古墳を嚆矢として当地域の古墳造営が始まっていくという見通しが指摘されている（深谷２０１５）。確かに白鳥塚古墳は玉野川水系における傑出した古墳造営である点は疑いもない。ほぼ同時期に二つの墓域を成立されていったという指摘を前提とすれば、ここに基盤とする二つの集団の存在を考えざるをえない。まさに上記した右岸の二つの遺跡群がそのまま当てはまるものと推測しておくことが妥当であろう。ここでは以上の諸点を総合して以下のようにまとめておきたい。

庄内川（玉野川・土岐川）が後の山田郡域に流れ落ちる場面に二つの特徴的な「山（高座山・東谷山）」が存在する。流域の遺跡や古墳の造営において古代人が強く意識した景観であることは間違いない。この空域に西暦1世紀以降大きく2つの部族集団がその西側に集落遺跡を立ち上げ、地の神々を奉り、やがて古墳造営を継続するに至った。埴輪使用が見られず、二つの古墳と武器形祭祀場（上志段味出土銅剣）、気噴遺跡群が「冬至軸」上に位置する出川大塚古墳・白鳥塚古墳を「気噴・大留遺跡群」を母体する集団と想定。ちなみに当該地区に埴輪使用が始まるのが松河戸Ⅰ式2段階からのようであり、この段階を白鳥塚古墳造営の下限と想定したい。続いて尾張戸神社から中社古墳・南社古墳（篠木2号墳を含め類似する埴輪を使用）は高御堂古墳を抱える「堀ノ内・神領遺跡群」を母集団と想定しておきたい。両者は高座山を崇める部族社会であり、後の下街道「原東山道」整備も、基本的には気噴から神領に至る遺跡群を基盤とした集団により整備されていったものと考えたい。それはこの地域を一つの領域とする考え方であり、その延長上に「志談郷」の設立が想定できよう。したがって玉野川（庄内川）を境界（郡界）とする通説には従わず、内津川水系まで取り込んだ領域を「志談」と呼んでおきたい。

8．尾張氏の登場と「原山田郡」

玉野川水系では志段味古墳群の動向を踏まえると古墳造営の停止期間が認められる。4世紀末から5世紀前半にかけて、濃尾平野全体の動向と同じく古墳造営がほとんど見らえないような「空白」域が読み取れる。そのような中で古墳造営を開始した最も注目すべき場面が存在する。すなわち名古屋市北区「味鋺」地区である。具体的には白山薮古墳を嚆矢とする味美古墳群の登場であり、この地域を「尾張氏」誕生の拠点的場面と考える事ができる。そしてその起因の一つに大毛池田層からの環境変化に対応する地域社会と新たな挑戦者たちの物語を想定した（赤塚２０２１）。すなわち庄内川水系および矢田川水系において、新しい古墳造営地を含めた新たな動きが活発化し、主に5世紀中頃から6世紀前半期にかけて新技術の移植と地域開発が加速していったことを示している。具体的には味美古墳群造営や東

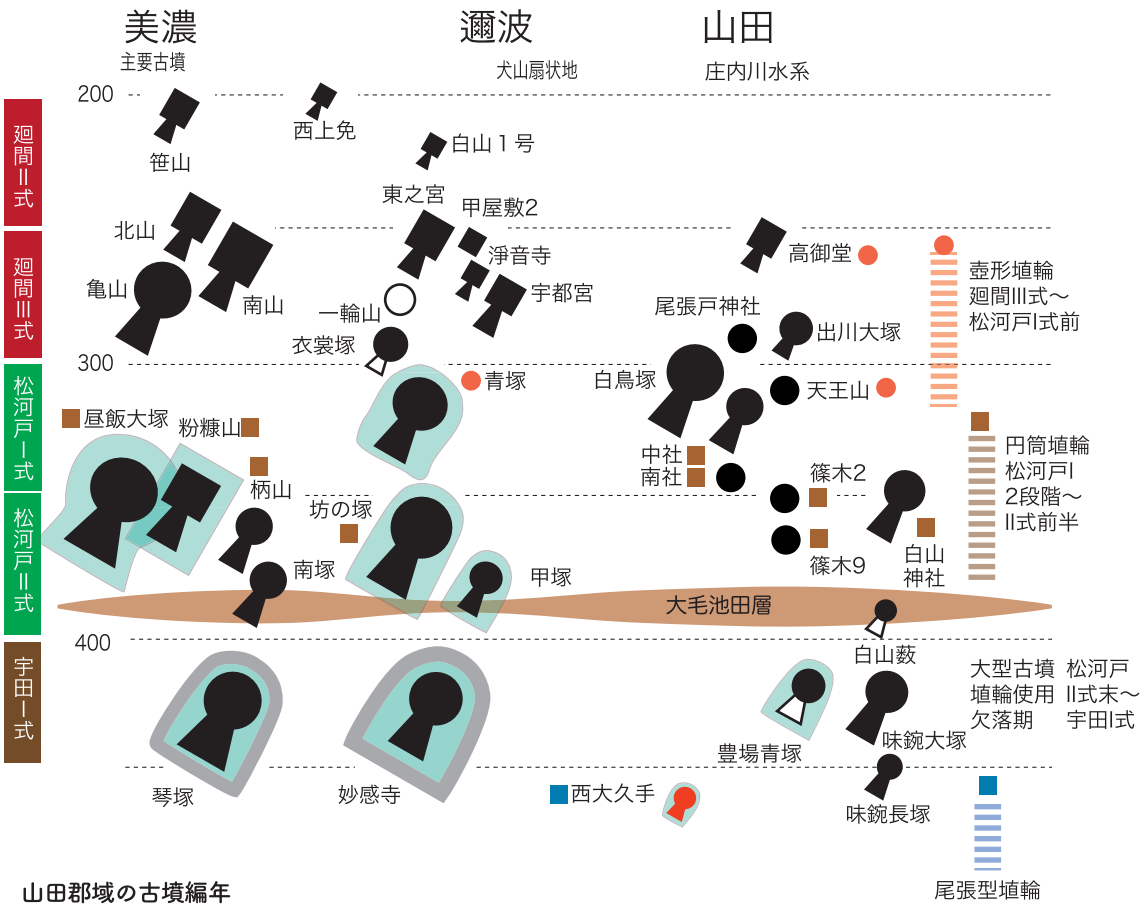


図５　山田郡域の古墳編年

山窯から始まり尾張旭市城山窯そして春日井市の下原窯などの操業。さらには篠岡丘陵周辺部での鉄生産遺跡など目まぐるしく時代が動き始める。これらは「味美古墳群」庄内川中流域を基点として地域社会の創設を意味するもと理解したい。

これを新たに「尾治（原山田郡域）」なる場面ととらえておきたい。その範囲は小牧市大山川水系から庄内川水系。内津峠を基点とする古道整備。小幡台地から矢田川・香流川水系。さらには名古屋台地熱田から天白川水系。加えて東海市名和地区を含めたアユチ潟周辺地域にまで及んでいる。拡散した文化の流れは各水系単位で集落を形成し、人の動きを含めた新しいネットワークを作り上げていったと想定したい。

原山田郡域とは環境変動に挑み新しい技術や殖産を起こし、地域社会を再生しようとする地縁的まとまりであり、その営みの上に「尾治氏」という地縁関係を基盤とする一族の歴史が作られていったと想像しておきたい。

9. 山田郡の成立

ここで今一度名古屋市北区の志賀公園遺跡群に話をもどそう。この遺跡の時代的消長を概観すると、前記したように次のように整理できる。弥生時代前期から中期、そして後期にかけての集落遺跡の時代。次に２世紀の大洪水層の後なかなか再開発に至らず、断続的な水田経営や西暦４００年前後、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式にかけて帆立貝式前方後円墳が造営されるが、極めて単発的であり祭祀遺跡的な様相が強い。そして本格的に遺跡が動き出すのは明らかに７世紀代からである。概ね７世紀中頃から８世紀を中心として９世紀にかけて竪穴建物・溝などの施設が存続し、その一部には官衙的な空間が出来上がっていたものと推定されている。いわゆる山田郡の中心施設としての「郡家」をこの場面に設定することができよう。この点は衆目の一致を得つつあるものと思われる。

天武朝以降大宝年間に至り国郡里制が整えられていくようであるが、まさにその時代に相当する遺構群の配置が志賀公園遺跡群の様相でもある。ところでここで言う「尾治（原山田郡）」域にはその後の春部郡・山田郡・愛智郡がほぼ全て含まれる



図６　出川大塚古墳跡からの東方風景（中央部に東谷山　左側が高座山　猿投山は東谷山に隠れ見えない）

のであるが、特に春部郡との関係は微妙なバランスが見えてくる。最も顕著なのが式内社の分布であり、社の本来地問題があるが、それにしても分布に著しい混乱が見られる。それは分布が複雑に入込、領域の線引が困難である。これを社の位置問題と理解する方法もあるが、春部郡が山田郡と邇波郡からいくつかの地区を割き、行政的に分離したと考えるとどうだろうか。春部郡は郷の数が少なく「池田・柏井・安食・山村・高苑」は、現状での小牧市大山川水系と春日井市西部および北名古屋市域と考えて問題はない。この領域はまさに本論の筋書きでは「尾張氏」による古道・窯業・鉄生産への地域開発場面であり、原東山道の基軸路線域であった。一方で「愛智郡」は名古屋台地を中心にし天白川・アユチ潟の完結した領域であり、「尾張氏」が最終的に進出し拠点化した地域と考えることができる。すると「本来の地（春部）」と「進出した場面（愛智）」を切り離した残りの領域が、そのまま「山田郡」としてのまとまりということになる。この地域的なまとまりの欠如、あるいは山田郡の成り立ちの経緯が、最後まで一つの領域としてまとまりを構築することができず、明確な郡的規模の志向性を生み出すことができなかった理由ではなかろうか。それは結果的に時代を経てやがて「山田郡」の（自然）消失につながっていく。結果としてほぼ庄内川以北が「春部郡」に、以南が「愛智郡」に分離統轄されていく事になる。その経緯や明確な時期までも、見事に歴史の闇の中に沈殿していくことになったのである。

参考文献

小林行雄・近藤義郎１９５９「古墳の変遷」『世界考古学体系３』日本Ⅲ 平凡社

久永春男１９７９「春日井市出川大塚古墳の歴史的背景」『郷土研究』23号　愛知県郷土資料刊行会
「明治33年と35年の二次にわたり、遺物が発掘され」との記載。

平凡社１９８１『愛知県の地名』日本歴史地名体系第23巻

都出比呂志１９８６『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室

梶山 勝１９８６「名古屋市守山区上志段味出土の銅剣について」『名古屋市博物館研究紀要』第９巻

福永伸哉１９９４「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第１号

浅田博造２０００『堀ノ内遺跡発掘調査概要報告書』春日井市教育委員会
ＳＤ０２資料の実見及び出土状況については浅田博造氏にご教示いただいた。

永井宏幸編２０００『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第90集

大下武２００１「出川大塚古墳について」『尾張古代史セミナー（５）』春日井市教育委員会

宮腰健司２００３「西志賀遺跡」「志賀公園遺跡」『愛知県史資料編２ 考古２ 弥生』

浅田博造編２０１４『高御堂古墳』春日井市遺跡発掘調査報告書第14集

深谷 淳２０１５『国史跡志段味古墳群の実像』名古屋市教育委員会

赤塚次郎２０２１「大毛池田層と５世紀前半期の光景」『邇波』第８号　ＮＰＯ法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク研究紀要

体感！しだみ古墳群ミュージアムを触る
－ユニバーサルミュージアムの実践－

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
服部　哲也

1．はじめに

2021年11月1日、国立民族学博物館（みんぱく）にて『ユニバーサルミュージアム―さわる！〝触〟の大博覧会』に参加しました（註1）。いたく感動しました。全ての展示物に触れることに最も大きな特徴がありますが、最初の「興福寺仏頭レプリカ」1点で、まさに「目から鱗が落ちる」でした。

興福寺の仏頭は中学1年の家族旅行で初見以来、何度も「見ている」であり、だから「触らなくとも知っている」的な感覚で対面していました。ましてやレプリカです。触ることの意味はいかほどか？半信半疑のスタートだったのです。ところが、展示を担当された広瀬浩二郎先生の「さわり方指南」の映像に習って、両の手で「大きくさわる　細かくさわる」「横や裏もさわる」を実践すると、なるほど仏さまの「若さや痛み」までが感じられる（様な気がしてくる）のです。触ることで次から次に「資料の持っている奥深さを楽しむ」ことができ、同時に「何も知らなかった！」ことも痛感したのでした。



写真1 興福寺仏頭レプリカを触る。耳たぶは穴があるんだ！

レプリカについても、どちらかというと懐疑的だった私自身の価値観が、この仏頭を触ることで大いに変わりました。確かに質感の違和感はあるのですが、レプリカからも資料の深みを十分に得られることが実感できたのです。まさに「さわるとわかる わかるとかわる」の本展覧会のテーマを、私の中で理解できた瞬間でした。

早速、触る実践を「体感！しだみ古墳群ミュージアム（SHIDAMU）」にて実施してみることとしました。

2．展示室にて触る

NPO法人ニワ里ねっとでは、「歴史の里しだみ古墳群」の指定管理者「しだみの里守グループ」の一員として運営に参加しています。学芸部門の担当です。指定管理者は展示内容には一切かかわれませんが、展示をご案内いただくボランティアガイドさんとは情報を共有することができます。私が感じた気づきがあれば、ボランティアガイドさんにも伝えることとしました。まずは、このガイダンス展示室で、「触れる資料」を確認してみます。

1．白鳥塚古墳「石英」（実物）
2．中社古墳「墳丘」（縮小模型）
3．中社古墳「埴輪」（原寸大模型）
4．中社古墳「埴輪片」（実物）と志段味大塚古墳「埴輪片」（実物）

以上の4点です。模型とレプリカ、そして本物は、き損の心配が低い「石」と「破片」と言えましょうか（註2）。また、キャプションにも「さわってみよう」とは書かれていますが、そこから「○○を感じよう」などの気づきのヒント的なことは示されていません。正直に申せば「触らせやすい」という理由だけで、選ばれているように思えます。個々、触ってみましょう。

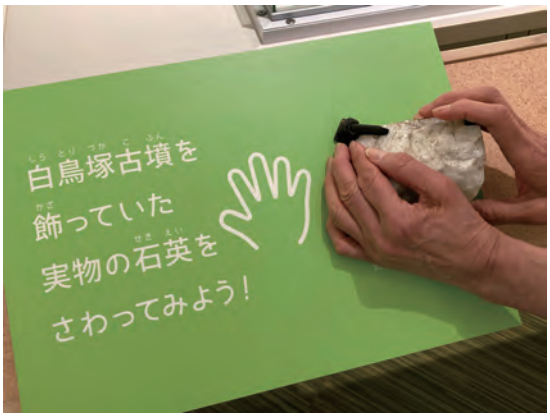


写真2　白鳥塚古墳の「白い石英」を触る

白鳥塚古墳「石英」（実物）　国史跡白鳥塚古墳は、墳丘葺石内に石英を多用することに特徴があります。特に墳頂部には、広く面的に石英が敷

かれていた可能性があり、古墳を「白く飾る」ことの重要性を想像させるものです。「色」に特徴がある資料を「触る」ことにどれほどの意味があるのか？でしたが、そこは「目から鱗」ですから、あえて、触ってみました。

指先で触るだけでは分かりませんが、手のひらで包み込むよう触ってみると「ゴツゴツ」した感触に気が付きました。石英には「角（かど）」があるのです。他の葺石は河川由来の転石で角はありません。視覚情報の「白色」に、触覚情報の「角がある」ことを感じ取ることによって、他の葺石とは明らかに違う地点から採取され運ばれた、石英の「特別感」をさらに深めることができると言えましょう。

また、同時に感じたことは、ここに丸みのある葺石を比較資料として置けば、より理解が深まるということです。白鳥古墳の現地では、その比較が可能ですので、現地での触察の勧めをボランティアガイドさんには伝えました。

中社古墳「墳丘」（縮小模型） スケールは１／１２０で、墳丘の長さは50㎝ほどのＦＲＰ製の模型です。特徴は、古墳だけではなく前後の地形も再現されていることと、古墳には埴輪と葺石も丁寧に表現されていることでしょう。まずは古墳外の地形部分を手のひらで撫でるように触ってみます。自然地形の箇所と、古墳築造時の掘削による人工的な崖面との違いが感じられます。人工的な崖面の気づきは、尾根を切断してこの古墳が築造されたことの理解に役立ちます。さらに、尾根を切断した崖面が不安定で、その後崩れて埴輪列を埋めたことの理解もしやすくなることに気がつきます。

次に古墳部分を片手で触ることと、両手で触ることの違いを感じてみました。後円部から前方部方向へ「両手で包み込むように触る」と、曲線（後円部）→くびれ→直線（前方部）を連続で対称的に感ずることとなり、片手ではわからない前方後円墳全体のプロポーションをよく理解することができます。両目で見ることで立体を感じると同様、両手で触ることが立体を感じる手立てであることを実感します。

さて、この復元模型には埴輪列と葺石も丁寧に再現されています。埴輪は、径２㎜高さ５・６㎜ととても小さいながら、触るのを前提に作られていますので、かなり強度があります。その結果、先ほどの「古墳の形を感ずる」触察に、実は埴輪がとても邪魔になるのです。結構「チュクチュク」と痛くもあるのですが、ここではたと思いつきました。「辟邪（へきじゃ）」だ！です。埴輪列が邪悪なものから古墳を守る使命があることをとても実感できるのです。両手を悪霊に見立てて古墳に襲いかかると、「痛い」埴輪と「固い」葺石によって見事に跳ね返されます。これは解説に使えるなあ！です。



写真3　両の手で「前方後円形」を感じ「辟邪」にはせる

ボランティアガイドさんにも少し興奮気味に紹介してしまいました。今回の触察一番の収穫でした。

また、模型の「見方（眺め方）」も変化をつけることで新たな発見があることに気づきます。実際の古墳は下から「見上げる」視点なので、模型も床に座って見上げてみました。すると埴輪や葺石がすごく強調されることとなり、また、左右から見比べることで、古墳が実は非対称形であることにも気がつきます。さらに、低い視点から立ち上がりながら視点を変えていくと「ドローン撮影」のような感覚も楽しめます。低い視線の子供には、高い視線へのサポートとして、踏み台の必要性も感じました。

そして、ここ古墳模型のコーナーでも、比較する模型を置きたくなりました。

中社古墳「埴輪」（原寸大模型） 中社古墳北側で発見された円筒埴輪列は、ほぼ完全な形で発見されたことでとても注目されました。これは、埴輪列樹立後すぐに、隣接するがけ面が崩れたため、樹立したままの状態で一気に埋没したことが理由に考えられます。先ほどの墳丘模型を触



写真4　埴輪模型に抱きつくボランティアガイドさん

ることで、人工の崖面を感じていれば、さらに理解は深まります。発見された埴輪列は、あまりにも良好に残っていたことで、調査後も抜き取らず現地に埋め戻しています。好判断です。そのため、展示物としては、原寸大の出土状態写真の横に、模型の埴輪を置く構成となっています。

当模型は実寸大ではありますが、型取りして作製されたものではありません。いわば本物風であり、「大きく触る・小さく触る」の触察を実践するものの、本物ではないことを追認するばかりで「う～ん、イマイチ」でした。ところが、思い切って抱きついてみて驚きました。「持ち上げたい！」という、全く違う感情が湧き出てきたのです（註3）。「持ち上げたい！」は、どのくらいの重さだろう？一人で運べるのだろうか？という疑問を生み、当時の工人たちの苦労にも思いを馳せることができました。これは、この模型が本物と同じ焼き物の質感や重量感だからこそ浮かんだ衝動で、FRP製では決して感じなかったのではないかとも思います。レプリカや模型の製作にあたっては、そのレプリカ・模型をどう活用するかを熟考して、形や材質を検討する必要性を強く感じた次第です。

なお、ここでも、中・後期の埴輪（模型であっても）があれば「比べる」ことができ、より楽しめるのではないかと思いました。

中社古墳「埴輪片」（実物）・志段味大塚古墳「埴輪片」（実物）　人工物の本物で、唯一触ることができる埴輪片です。ただし、直径6㎝の「小窓」からしか触ることはできず、両手で包み込むことはもとより、手のひらで撫でることもできません。資料のき損を恐れてのことでしょうか？あまりにもケチ臭い。これでは、本物を触るコーナーがあるという既成事実を作っているだけに思えてしまいます。また、「比べてみよう」ともありますが、比べる部位が、胴部と突帯部と違っていることにも配慮を感じません。そして資料を指で突くことしかできないのでは、比べてその差に気づかせることはまず無理でしょう。3年たった現在、皮肉なことに、両破片とも6㎝の窓の中だけが突つかれて滑らかになり、余計にその差が分りづらくなっています。

今回の触る実践において、再考を強く感じたのが、本物を触れるコーナーであったとは！とても残念なことでした。

3．ボランティアガイド研修にて

私が感じた気づきは、12月17日18日両日のボランティアガイド研修にも提示してみました。ガイド活動に役立たせてほしいとの思いです。そして、その時のボランティアガイドさんの反応がとても参考となりましたのでレポートしておきます。

「触れるコーナー」の危うさ　「触ってください」とすすめると、ほとんどの人は片手の指先で撫でます。ここでハタと気づいたのは、前述の埴輪を触る6㎝の小窓です。なるほど6㎝の小窓内を撫でる程度でも、多くの人は「触った」ことに納得してしまうのです。とすれば、こうした中途半端な「触れるコーナー」はかえって逆効果、とてもマズイと感じました。重ねて再考を願いたいです。

両手で触ることに慣れる　遠慮がちにしか手が出ないのは、博物館で資料に触るという行為に慣れていないことも一因に感じます。特に、両手で触ることは、指示を与えない限り、まずしないことも分りました。触れ



写真5　突つくしかできない本物の埴輪コーナー

る資料や展示物が増えることはもちろんですが、どう触ると良いかの「触り方レクチャー」も地道に広める必要を感じます。まずは「両手で大きく触る」を基本に、自らが触り慣れること、そして来館者には「触る」を勧めることをボランティアガイドさんに伝えました。私も実践していきたいと思います。

「さわるとわかる」実例は示す　触り方がおざなりな感じに見受ける人もいました。自身がそうであったのでよくわかるのですが「触らなくても知っているわい」です。漠然と「触ってみよう」だけでは、その必要性を感じない限り触りません。今回、古墳の模型に触る→埴輪の痛さを感じる→辟邪に想像を走らせることや、埴輪に抱きつく→持ち上げたくなる→当時の埴輪運びに思いを馳せるなどには、そんな方々にも大いに賛同を得ました。もちろん、触ってそこから何を感じとるかは自由なので、一定の答えに誘導するようなことには躊躇もしますが、「触るとこんなことが分かるよ」というヒントや実例は示した方がいいと思いました。

比較資料を置く　ボランティアガイドさんとの対話の中で、最も共感を得たのは、比較する資料があった方が良いということでした。これは資料を見るだけでは感じなかったことで、触ることによって「比べたくなる」感情が引き出されるのでしょう。「見た＝わかった」で思考が止まってしまうことも、「触る」から入ることで、ほかの感覚が刺激される例として大いに納得してもらいました。

4. 展示室での課題

「古代ロマンを五感で体感」名古屋市が示した「歴史の里しだみ古墳群」の基本理念です。そして、ガイダンス施設にも「体感！しだみ古墳群ミュージアム」と、わざわざビックリマークまでつけて「体感」を強調しています。言うは易く行うは難しです。

『ユニバーサルミュージアム展』に参加し、視覚ではなく触覚から入ることで、他の五感が刺激されることをまさに体感しました。そして、「体感！しだみ古墳群ミュージアム」の看板に偽りなしにするための第一歩として、現状のガイダンス内を「触る」実践してみました。「触れる」資料はごく限られてはいましたが、それでも一定の有効性は確認できたと思います。

体感と体験　一方、このガイダンスは「体験型施設」とも謳っています。「体験」のその実は、勾玉づくり、ミニ埴輪づくりなど、いわゆる「なんちゃって体験」です。ところがこの「なんちゃって体験」昨年度はなんと9，500人を超える参加者があり、収入的にも軽視できません。そこで危惧するのはこれで良しとなることです。実際に「体験」のみで古墳を見ない団体もあるようで、本末転倒が起きているとも感じています。「なんちゃって体験」を導入に位置づけることは否定しませんが、それが「体感」に置き換わってしまわないよう、行政も指定管理者側も注意する必要があるでしょう。

レプリカの活用　次に、現状の展示室での工夫を考えてみます。まず浮かぶのがレプリカの活用です。実は、当古墳群では、埋葬施設の発掘調査が多くありませんので、副葬品の展示物がとても少ないです。とくに前・中期の古墳では志段味大塚古墳出土の副葬品が唯一といってもよいのですが、残念ながら京都大学が所蔵し管理されています。そこで、展示にあたっては、副葬品のレプリカが製作されました。レプリカは3次元計測、X線写真、蛍光X線分析など最新技術が駆使され、形・原材料にもこだわったとても優れたものとなっています。現在はケース内に収められたものと、ジオラマの馬とそれに跨る武人に装着する形で展示されています。

もちろん触る展示にはなっていませんが、興福寺仏頭レプリカを触っ



写真6　さわって、着けて、乗れるといいなぁ



写真７　島田清徳「境界division-m-2021」を楽しむ私

て「目から鱗」だった私は、真っ先に活用したいと思いました。原材料にまでこだわったレプリカですから、触覚に限らず匂い（嗅覚）も刺激されますし、鈴のついた副葬品も多いので音（聴覚）も楽しむことができます。鎧や冑を装着し、さらにジオラマの馬に跨ることができれば大いに古墳時代を「体感」できましょう。「さわれない資料」を「さわれるもの」に変換したのがレプリカ。レプリカだからこそ積極的に触る、を是非実践したいものです。常時は無理でも「復元レプリカを触ろう！」のような、イベントの開催を提案したいと思います。

5．おわりに

さて、「体感！しだみ古墳群ミュージアム」は志段味古墳群のガイダンス施設です。主役は古墳。あくまでも古墳をメインに「体感」できる工夫をしなければなりません。これがとても難しい！今回のテーマ「触る」においても、墳丘盛土や葺石を触ってみるなどはこれまでも積極的に進めてきましたが、部分を触って大きな古墳を感ずることの難しさを痛感しています。

では「ユニバーサルミュージアム」展の、大規模作品はどうだったのか？印象的だったのは、島田清徳さんの「境界ｄｉｖｉｓｉｏｎ-ｍ-２０２１」という作品でした。視覚を断続的に遮断されながら、大量の布片をかき分け彷徨（？）するもので、作者の島田さんは「周囲の気配に全身の感覚を研ぎ澄ませ、自らの五感とふれあう「もの」や「こと」を楽しむ」と述べられています（註４）。

やはり、全身の感覚で今ある古墳を楽しむことだよね！です。そんなイメージをもって、あらためて当古墳群に立ち、あくまでも「私の感じたこと」を記し、今後の手がかりとしておきます。

志段味古墳群では、完全に復元・再現された古墳と、極力手を加えず現状維持の古墳とがあります。まず、原寸大レプリカと私は称している完全復元・再現の志段味大塚古墳に立ってみます。整然と並ぶ埴輪列や葺石、再現の木棺。言葉にすれば「粛々と」でしょうか。そして、そこに現れるのは、きらびやかな古代衣装をまとい王に扮した俳優さんです。

一方、樹木生い茂り一部は壊れた、現状維持の古墳。木々の音や光、そこに集まる鳥や虫、言葉にすれば、「ざわざわ」です。そこには、リアルな王は登場しませんが、木々の間から古代人にそっと覗かれている気分です・・・

遺跡で何を体感するのか、させるのか。そんなことを考えるのが『ユニバーサルミュージアム―さわる！〝触〟の大博覧会』に参加したことで、ますます楽しくなりました。

【註】

註１…見学ではなく参加という表現になります。南山大学黒澤浩先生にお誘いいただき、当日は広瀬浩二郎先生にご案内いただきました。とても感謝いたします。

註２…このほか、展示室内の「触れる」ものとして、着用可能な古代衣装と髷、回転のぞき窓、古代風の椅子があります。

註３…ただし、模型の埴輪は台に固定されていますので、抱きつくことはできても持ち上ることはできません。少し残念です。

註４…国立民族学博物館２０２１『ユニバーサルミュージアム―さわる！〝触〟の大博覧会』展示図録より

平面交差した線路にあった東犬山駅

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
古川　博昭

東犬山駅とは

東犬山駅とは、広見線がかつて犬山口駅から分岐していたころ、小牧線と広見線がクロスする位置に存在した駅である。小牧線が開通した1931（昭和6）年4月29日に開業した。広見線はその前から開通していたが、小牧線が設置される前はその場所に駅はなかった。そして15年後に廃止された（図1）。



図1 東犬山駅の位置　国土地理院ウェブサイトに加筆

東犬山駅開業について

東犬山駅は犬山駅から0・5キロ、犬山口駅からも0・5キロしか離れておらず、当時は駅の周囲に集落はなく東側は延々と広がる農地であった。西側も犬山南小学校や県道27号春日井各務原線から西にしか集落はなく、犬山口駅がその集落のための駅になっていた。つまり駅周辺の人の利用を見込んだ駅とは言えない。

駅を作った理由は小牧線と広見線が平面交差することになって列車運行の制御が必要となり、人員を配置しないといけなくなったからではないかと思われる。それが駅を作った一番の理由だと私は思う。

平面交差になったのは、後からできた小牧線が元からあった広見線を立体交差する施設を作らなかったからである。なぜ作らなかったか、その理由を名鉄の社史や犬山市史などで調べたが記されていなかった。推測するに、小牧線がケチったただけでなく広見線もそもそも的なちぐはぐさがあった。

広見線は当時の名鉄が1923年に着手し、1925（大正14）年4月24日に開業したが、犬山口駅が起点になった。当時の犬山町は「町の盛衰にかかわるから犬山駅にしてほしい」という要望を出していたが犬山口駅になってしまったのは、名鉄の言い分としては「用地や建設費その他の事情で最初の計画通り」だそうだ（名古屋鉄道社史110ページ）。前号の紀要にも書いたが、実は犬山駅は1925年当時移設の真っ最中で、広見線開業の翌1926（大正15）年5月に新犬山駅として80メートル東に移動して開業した。これが現在の犬山駅である。だから広見線は犬山駅を起点にしたくても、できなかったといえる。

では小牧線はどうであったか。鉄道による地域の発展を知った楽田村の村長齋藤小太郎を筆頭とした有志がわが村にも鉄道をと、尾北鉄道株式会社を設立して鉄道開設に名乗りを上げ、犬山町と小牧町を結ぶ鉄道の免許が1925（大正14）年10月に下りた（楽田村史162ページ）。そして1927（昭和2）年2月に着工したが楽田村の努力だけでは完成に至らず、1929年に名鉄に合併し、1931（昭和6）年4月29日に開通した（名古屋鉄道百年史150ページ、なお小牧以南は2か月前に開通）。小牧線は犬山駅を終点とした。犬山口駅にはしなかった。楽田村史などを見ても犬山口駅にしたかったとか、すべきとか、そんな記述は一切なく、無条件に犬山イコール犬山駅とみなされていた。当時の地図を見ても、犬山駅につなげるならば民家を移転させることもほぼなく、犬山口駅につなげることに比べて問題も少ないと思われる。

この結果、名鉄自社の線路が十文字にクロスする事態に至ったのであるが、平面交差でよしとしたのは、

将来的に広見線の犬山駅付け替えを予定していたからとも言えるが、これも推測でしかない。

東犬山駅の構造の考察

東犬山駅を写した写真は管見の限り見つけていない。ただ、空中写真がその痕跡を見せてくれる。それによると、広見線と小牧線がクロスする南東に漏斗状に広がる敷地が見える（図2）。



図２　１９４７年の空中写真　国土地理院19471226岐阜（USA-M725-No2-167）に加筆

この写真が撮られたのは広見線が犬山駅発着に付け替えられ、同時に東犬山駅も廃止されてから2年近く経っている。もう駅ホームなど残っていない状態である。残された漏斗状の敷地に着目すると、ここは現在名鉄関係の変電所と作業用建物になっている。そして小牧線の西側にも名鉄所有の空き地がある。ということでそこが東犬山駅が存在したところと断定できる。そこで、その敷地に駅を想像してみた（図3）。

広見線と小牧線の乗り換えがしやすいように、ホームはL字形とした。駅の入り口は通常集落に最も近いところに作るが、駅誕生の経緯からその考慮は不要なので、北西から南東に斜めの現在も残る道に想定した。小牧線西の列車制御係員室は、犬山と犬山口発の列車を駅の手前で停止させる必要があると思い描いてみた。そこも現在名鉄の土地である。

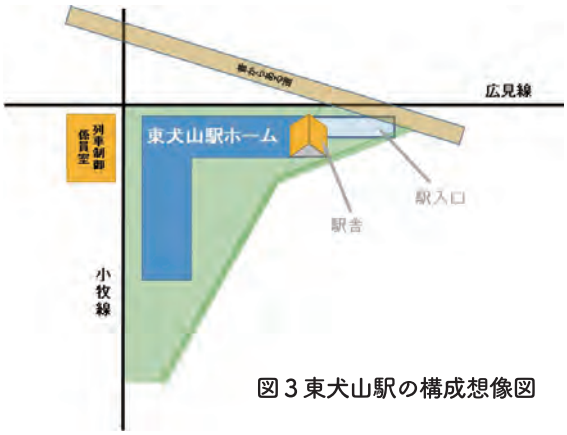


図３東犬山駅の構成想像図

さて、広見線は電車であり、小牧線はガソリンカーであった。お互い車両を乗り入れさせる必要はあったであろうか。その必要を思わなかったので、私は渡り線はなかったと思い、描かなかった。なお、渡り線がなくても遠回りだが犬山駅・犬山口駅経由で回送することも可能である。このクロスポイントは合流することはなく、ただ交差するだけである。線路のクロスは次の写真でイメージできる（図4）。

この写真は現在の名鉄本線と犬山線の分岐点のもので、左上から右下に行く線路が本線の上り、右上から左下が犬山線の下りで電車は右上方向に進む。可動式の分岐器はなく、東犬山駅ではほぼ直角に交差していたはずである。

東犬山駅の廃止

東犬山駅が廃止されたのは広見線を犬山駅起点に付け替えた１９４６（昭和21）年3月1日である。第二次世界大戦中には不要不急という理由で小牧線の五郎丸駅や犬山線の木津用水駅などが休止させられたのだが、東犬山駅はそれを生き延びたのに、広見線とのクロスが解消されたとたん、お役御免になって退場した。このことも東犬山駅が設置された理由を補強するものである。また

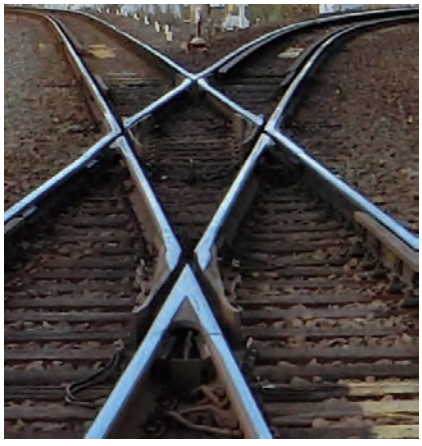


図４ クロスする線路の画像

広見線の付け替えが敗戦後8カ月でなされているので、計画は戦争中からあったのだろう。戦後の復興に合わせてのことではなく、もとから付け替える予定であったと思われ、それが平面交差で間に合わせてしまった理由を示している気がする。

図5に広見線の廃線区間と東犬山駅を復元してみた。東犬山駅跡は名鉄の施設になっていて、地上から見た風景に駅をしのばせるものはない。私が撮影した写真の中で最もわかりやすそうなものを載せる（図6）。

単線の線路をまたいだ鉄骨の構造物とその右隣りの建物が変電所である。その建物から右手に続く白い壁も名鉄の施設であるが、その壁のあたりに小牧線の東犬山駅のホームがあったと思われる。戦後間もない空中写真の漏斗状の敷地はこの壁の南端のさらに先が始まりであった。現在の空中写真に赤枠で名鉄関係敷地を明示して、駅跡も追加して示す（図7）。

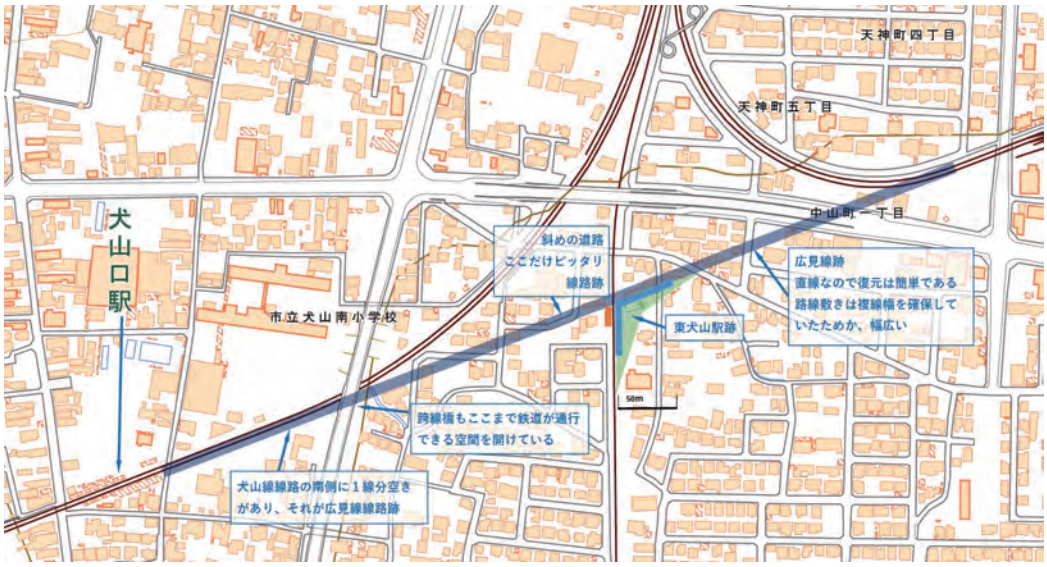


図5 広見線の廃線区間と東犬山駅　国土地理院ウェブサイトに加筆



図6 地上から見た東犬山駅跡

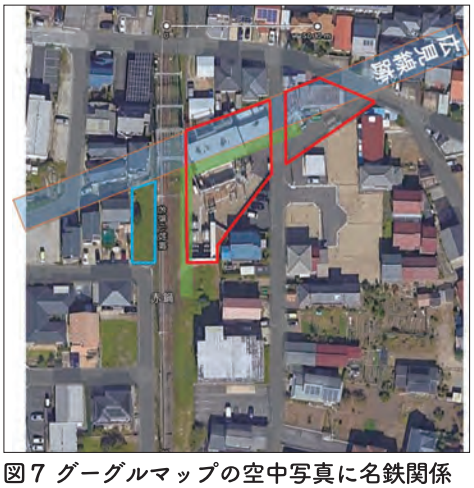


図7 グーグルマップの空中写真に名鉄関係敷地を加筆

このように名鉄の施設が広見線と漏斗状のふくらみに沿って存在していた。画像の水色で囲った箇所は名鉄所有の空き地であり、私は列車制御係員室をそこに想定した。その空き地は地上で写した写真の線路の左に写っているものである。

終わりに

東犬山駅という犬山市内にあった一風変わった駅を紹介しました。駅周辺の住民の利便性ではなく（周辺に住民がいない！）、鉄道運行のための駅であって、それも2線が平面交差するという特殊な鉄道設備があったからでした。当時のダイヤは広見線も小牧線も片道40分ごとか1時間ごとなので、ダイヤが守られていれば大丈夫だが、ひとたび混乱すれば交差部で衝突する可能性がある。当時の夜は真っ暗だろうからなおさら危険である。そんな状態で運行されていたことに気付いていただければ幸いです。

【参考文献】
楽田村史　1967／8／15　楽田村史編纂委員会発行
名古屋鉄道社史　1961／5／16　名古屋鉄道発行
名古屋鉄道百年史　1994／6／13　名古屋鉄道発行

学校資料を活用した授業について

NPO法人　古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
望月 友恵

はじめに

近年、学校資料（注1）に関して「どう活用するのか」が盛んに取り上げられている。学校資料研究会によって『みんなで活かせる！学校資料 学校資料活用ハンドブック』が刊行され、タイトルの通り「学校資料」を活用することが主眼におかれた内容だ。考古学の分野でも『考古学研究』で「学校と考古学」に関する特集が組まれ、学校に関わる考古資料をどのように扱い、活用されていくべきかが議論されている。こうした背景の一つには、少子化によって学校の統廃合が進んでいく中で、多くの学校資料が散逸・廃棄の危機にさらされている状況がある。散逸・廃棄を食い止めるためには、普段は学校資料（史料）と関わらない人に、その「価値」を発信することこそが重要であると指摘されている。（2016、和崎）

犬山市内にも小学校が10校、中学校4校、高校が2校あり、各学校にはそれぞれの学校に関わるあらゆる「学校資料」が存在している。NPO法人ニワ里ねっと（以下ニワ里ねっと）では、これまで犬山市立犬山西小学校や犬山市立池野小学校に所蔵されている考古資料を整理・報告し、学校から借用するなどして青塚古墳ガイダンス施設での展示に活用してきた（2019a、大塚ほか）。その後も、学校側とのやり取りが引き続きあり、学校の授業内で「学校資料」を活用をする機会をいただいた。本稿では、学校資料を活用した地域の歴史学習の事例を報告するとともに、NPO法人が学校と協働していくことに関して若干の考察をし、今後の展望を述べたい。



写真1 池野小学校の考古資料

学校資料活用の事例報告

（1）犬山市立池野小学校

活動の経緯

池野小学校は、犬山市東部に位置する池野地区にあり、江戸時代に築造された入鹿池に隣接している。入鹿池周辺では旧石器時代～弥生時代の石器が多く採集されており入鹿池A遺跡、入鹿池B遺跡などが散布地として登録されている。また、池周辺の丘陵地には古墳時代後期を中心とした古墳が複数確認されており（2014、服部・近藤）、出土遺物の一部は青塚古墳ガイダンス施設にも保管・展示されている。

池野小学校の所蔵資料について、考古資料が展示されていると地元の方から伺い平成30年度に学校の協力を得てニワ里ねっとが資料調査をし、平成31年度には考古学に興味関心を持っていた池野小学校の児童（6年生）1名とともに展示パネル

犬山市立池野小学校　所蔵資料活用授業案

活用資料1〈古墳時代の須恵器資料〉

（1）資料の内容
入鹿池周辺には6世紀から7世紀にかけての小古墳が数多く築造されていたことが知られており、周知の埋蔵文化財包蔵地としては、十三塚古墳群、明治村古墳、奥入鹿古墳などがある。池野小学校所蔵の資料のうち、須恵器資料の多くは、こうした入鹿池周辺の古墳群から出土したものと考えられる。出土地点の詳細は不明であるが、完形品のものもあり、良好な資料である。

須恵器7点　（蓋・杯蓋・杯身・平瓶・提瓶・細頸瓶・長頸瓶）、金環1点、勾玉1点
〈資料写真〉



須恵器の杯身と杯蓋



須恵器の平瓶

（2）学習における活用案
1）第6学年社会　授業名「身近な古墳を知ろう」
古墳時代の学習に際して、学校周辺にも残る古墳について学ぶ。日本各地に数多く作られた古墳が、私たちの住むまちにもあることを知ることで、歴史的事象をより身近な具体的な事柄として理解を深めることができる。
授業内で本物の資料を実際に手に取ったり、観察・スケッチをすることで、地域の歴史への興味関心を高めるとともに、資料を見る力も養うことができる。また、資料がどういった焼き物なのかを調べる「調べ学習」にも活用できる。

資料1 所蔵資料活用授業案

を作成し展示ケース前に設置をした（2019b、大塚）。学校側へは、資料についてどのようなもので、どのような授業に活用できるのかを簡単にまとめた授業案を提案させていただいた（資料1）。新型コロナウィルス感染症の拡大もあり、すぐに授業での活用は結びつかなかったが、その後先生からご連絡をいただき、令和3年6月に学校所蔵の考古資料を活用した授業を実施し、令和4年度4月にも同様な内容で実施した。



写真2 池野小学校での授業の様子

授業の概要

授業は45分間で、小学6年生の1クラスを対象に行った。まず導入として、古墳について知っていることを児童らに挙げてもらった。児童からは「お墓」や「埴輪」といったキーワードや、同じ犬山市内にある青塚古墳などの名前が挙がった。次に、NPO職員から古墳についての概要や池野小学校周辺にある古墳についてスライドを使いながら紹介し、配布した地図で学校や古墳の場所を確認してもらいマークしてもらった。授業後半は学校所蔵の須恵器数点と勾玉・金環を並べ、2グループに分かれて、それぞれにNPOスタッフがついて資料の観察を行った（写真2）。須恵器や勾玉は実際に手に取ってもらい、資料の質感やどのような使い方をしていたのかなどを児童らに直接問いかけ、対話形式での授業を行った。

授業の様子

古墳についての知識はあるが、小学校の周辺に古墳がたくさんあることは知らない児童が大半で、紹介した際には驚きの声が挙がった。児童からの感想でも、学校の周りに古墳があったことに驚きをもったことを書いているものが最も多かった。考古資料は、普段から児童らが行き来する昇降口に展示してあるが、資料にきちんと対峙するのは初めてという子がほとんどで、興味津々に触っている姿がとても印象的だった。「普段はガラスケースに入っている」、「学校の近くにあった古墳から出た本物」なので、「貴重」で「価値がある」ものだから大切に触らなくてはいけない、と怖々と触れている子も多かった。

（2）犬山市立栗栖小学校

活動の経緯

栗栖小学校は、犬山市の最北部の栗栖地区に位置しており、児童数11名（令和4年度）の小規模校である。この栗栖小学校では平成23年度から継続して栗栖プロジェクトの一環で歴史学習授業を行っている。この活動については別稿に譲りたい（2017、NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク）。本報告においては、池野小学校の所蔵資料を活用した「入鹿切れ」の授業に関して報告をする。

栗栖小学校からの依頼があり、地域学習の時間の中での授業を令和2年1月に行った。池野小学校に「入鹿切れ」の際に使用した人足札（注2）が所蔵されていることを把握していたため、資料を池野小学校から借用し活用した。



写真3 栗栖小学校での授業の様子

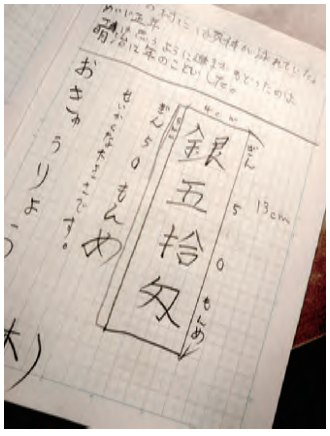


写真4 栗栖小学校
児童が観察した記録

授業の概要

授業は45分間で、3・4年生の複式学級1クラスを対象に行った。入鹿池、入鹿切れについてスライドを利用しながら解説したのち、実際に資料に触れながら観察してもらった。（写真3）

授業の様子

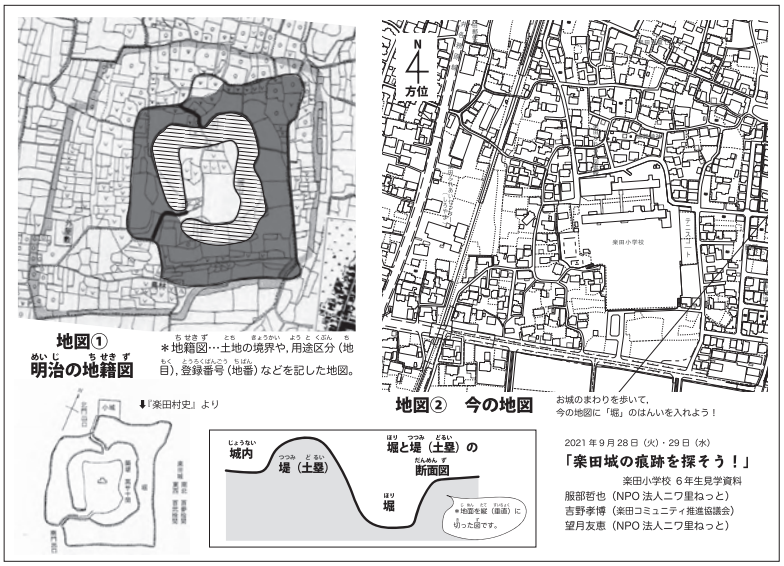
少人数による授業であったため、児童一人一人がしっかりと資料を手に取って観察ができた。人足札に書かれている文字や厚みなど細かな部分まで観察してノートに記録しており、資料を読み解くことができていた（写真4）。

（3）犬山市立楽田小学校

活動の経緯

楽田小学校は犬山市南部の楽田地区に位置し、ニワ里ねっとが管理する青塚古墳史跡公園に程近い学校である。楽田小学校の建つ場所は、小牧・長久手の戦いに際して豊臣秀吉方の本陣になった楽田城であり、場所そのものが歴史的価値のある「学校資料」であるといえる。校内には土塁の一部が残存し、楽田城を示す石碑が建てられているが、学校周辺の現地割にも城跡の痕跡が明瞭に残っている。

小学校から地域連携授業の提案をいただき、戦国時代の学習の一環で校内に残る「楽田城」について学ぶ授業を、令和3年9月に授業を行った。実施前には担当の先生に作成いただいた学習指導案をもとに打ち合わせをし、単元（戦国の世から天下統一へ）や授業目標、学習過程などを確認した。また、当日は楽田コミュニティのスタッフ1名にも授業のサポートにご協力いただいた。



資料2 楽田小学校　当日資料

授業の概要

授業は90分間で、6年生3クラスを対象に行った。前半25分は、授業担当の先生からこれまでの授業のおさらいと本授業への導入をしていただいた。授業後半はニワ里ねっとスタッフが担当し、現在の地図と明治時代の地籍図を見比べて楽田城の痕跡を辿りながら小学校の周りを確認して歩いた（資料2・写真4）。

授業の様子

普段歩いている道が、楽田城の姿とどう重なるかを地図上で発見する作業は謎解きのようでもあり、児童らも積極的に学習に取り組んでいた。現在の地割にも城の痕跡を見出せることを自らの力で発見することで、地域の歴史を調べる楽しみを感じることができたのではないだろうか。現地で地図を見比べながら、地籍図上の現在地を辿る作業には苦戦してる児童もいたが、サポートのスタッフや授業担当の先生がそれを助けた。

今回の授業では導入部を学校の先生、後半をニワ里スタッフが担当したが、導入部の問いを後半で回収することができなかった。事前の打ち合わせで擦り合わすことができておらず、今後の課題としたい。



写真4 楽田小学校での授業の様子

おわりに

以上に報告した3学校における学校資料を活用した授業を通じて、改めて学校資料を活用することの魅力を感じた。

まず、学校資料は「身近な地域」と強く結びついている点だ。いつも過ごしている町に、実は歴史が潜んでいることを学校資料は伝えてくれ、資料を通じて歴史を身近に感じることで過去の延長線上に現在の生活があることを体感することができる。地域への愛着を育むきっかけにもなり得る。

また、資料に触れたりじっくり観察できることも学校資料を活用するメリットのひとつであろう。近年、タブレットを活用した授業なども進んでいるが、ディスプレイ上で得られる視覚情報だけよりも、実際に資料を触れることによって得られる質感や重量などの感覚は、児童の感性に訴えかけることができる。学校所蔵であれば博物館などから借用する手続きなども不要であり運搬の手間も省けるため資料の利用がしやすい。その他にも色々とメリットがあるとは思うが、いずれにしても学校に資料があるのであれば活用するにこしたことはない。

では、何故必ずしも活用されていないのか。それは、学校資料を解釈するにはある程度の専門的な知識が必要であるからだ。例えば考古資料の場合、古墳時代の須恵器と鎌倉時代の山茶碗の区別を学校の先生が判断するのは困難であろう。その場合、もちろん公共機関からの支援もあるだろうが、専門的知識をもったNPO法人や企業などがこうした学校活動に積極的に関わっていくことが今後は一層盛んになっていくのではないだろうか。現に、平成29年3月の社会教育法の改正により「地域学校協働活動」（註3）が法律上にも位置付けられた。地域と学校の関係性が見直されている状況にあり、多様な人材が学校活動に関わることが求められている。

団体や企業にとって学校活動に関わることはメリットも大きい。当NPOの場合、こうした取り組みは、次世代に向けて地域の文化遺産の価値を伝えることができ、団体がコンセプトとしている「文化遺産のみえるまちづくり」実現への重要な活動に位置付けられる。また、特定の子どもだけでなく文化遺産に触れる機会の少ない子どもたちへも分け隔てなく発信できる「学校」という環境で行えることも重要だ。

こうした活動を一過性で終わらせないためにも、我々のような地域団体と学校とが常にコミュニケーションをとっていくことが必要不可欠だ。「学校資料」のもつ価値を分かりやすく伝え、どう活用していくとよいかを、常に発信しなくてはならないし、コミュニケーションを取る場も必要だ。また、一方的な提案に終始するのではなく、双方が協働して進めていくことができる仕組みが整備されていくことが求められる。

【註】

註1…「学校資料」という用語に関して、村野氏や和崎氏によると「学校に関わるあらゆるモノやコト」と定義されている（2019、村野・和崎）。有形・無形、動産・不動産問わず、その内容も学校史自体に関わるものだけでなく、広く郷土史に関わるもの、芸術に関わるものなど多岐にわたり、普段の学校活動で生成されているものすべてがあてはまる。また学校に所蔵されるとも限らず、学校外にある学校に関する資料も含まれる。本稿で取り扱うのは、学校に所蔵され、特に郷土史に深く関わる考古資料を中心としている。

註2…池野小学校所蔵の人足札は、入鹿池が決壊した際の堤再建工事で使用された賃金の引き換え札であり、名古屋市博物館にも同様の資料が所蔵されていることを名古屋市博物館の鈴木 雅氏よりご教示いただいた（2019、名古屋市博物館）。「入鹿切れ」を伝える資料は少なく、今後はさらに調査を進め、所蔵学校である池野小学校を始め他校での活用もできればと考えている。

註3…「地域学校協働活動」とは、「地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動」（文部科学省HP　https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/kyodo.html より）とされる。

【参考・引用文献】

大塚友恵 2019a「犬山市立池野小学校所蔵資料について」『研究紀要邇波』第6号

大塚友恵 2019b「学校における考古資料の活用」あいちの考古学2019 ポスターセッション資料

考古学研究会編集委員会 2017『考古学研究』255号

名古屋市博物館 2019『特別展 治水・震災・伊勢湾台風』

服部哲也・近藤健一 2014「入鹿池周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要 邇波』創刊号

村野正景・和崎光太郎 2019『みんなで活かせる！ 学校資料 学校資料活用ハンドブック』

和崎光太郎 2016「学校所蔵史料の保存と活用―京都市を事例として―」『日本歴史学協会年報』31号

NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク2017『栗栖地区分布調査報告書』

ニワ里ねっと会員募集

会 費

賛助会員 又は 正会員

個人・団体：１口　3,000 円

* 賛助会員（目的に賛同し援助するために入会した個人および団体）
** 正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

会員特典

1．会員証の発行（裏面はスタンプカードになっています）
　イベントにご参加いただいてスタンプを集めると記念品を贈呈
2．会報「さとの四季だより」を年６回（隔月）お届け
3．ニワ里ねっと企画に会員料金でご参加
4．木之下城伝承館・堀部邸の優先利用権
　（座敷等半日無料利用権２回・貸切利用権１回）
5．研究紀要「遡波」を希望者に贈呈

入会申込の流れ

会員期間：５月の総会から翌年５月総会までの１年間
１）青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付
　申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。
２）お振込（郵便振替口座）による受付
　新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等をご明記ください。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

【郵便振替口座】
口座番号　　00850-9-198552
口座名称（漢字）　特定非営利活動法人　古代遡波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ）　トクヒ）コダイニワノサト　ブンカイサンネットワーク

上記口座にて、寄付金も受付けております。
ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。

ニワ里ねっとの活動に
参加いただける方
ご支援していただける方を
広く募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かした
まちづくり活動に
参加してみませんか？



NPO 法人
古代邇波（にわ）の里・
文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

木之下城伝承館・堀部邸
（NPO 事務所）
〒 484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園
ガイダンス施設
〒 484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

《ニワ里ねっと HP》
http://niwasato.net/home

《木之下城伝承館・堀部邸 HP》
http://horibetei.com

《FB》https://www.facebook.com/niwasatonet/
《twitter》https://twitter.com/niwasatonet

研究紀要　第９号

niwa 邇波

《編集・発行》
NPO 法人
古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
（ニワ里ねっと）

《写真》
中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》
令和４年５月２１日



邇波史楽座の一幕